

現地研究サイトに教えられる

望月 秀俊*

鉄筋コンクリート3階建て北側1階の窓際、館内暖房は運転してはいるが、天井の高いこの部屋では、2階を足下から暖めるのに貢献しているようで、時々仕事を終えてすっかり冷たくなった風が、頭の上から吹き下ろしてくる程度である。陽も差し込まないので、生来の寒がりである小生は、電気ストーブで足下を暖めてはいるものの、昼間でもなかなかコートが脱げない。そういえば、学生の頃の実験室もこんな感じだったのが、懐かしい。そんな1月の仕事場のパソコンに、一通のE-mailが舞い込んだ。編集委員長からの原稿執筆依頼だった。編集委員長によれば、「学会賞(論文賞)受賞者には、“もれなく”この依頼が舞い込むことになっている。(意識)」そうである。「随筆」だということもあり、簡単に引き受けてしまった。まさに引き受けて“しまった”のである。

職場の出張・会議・報告書作成シーズンも何とか乗り切り、パソコンの前に座って、何を書こうか、思案した。過去の「土粒子」を読み返してみたりもした。どうやら、過去の執筆者の皆様も、それぞれにご苦労なさったようである。吐き出したい有象無象がないこともないが、どうにも学術雑誌には適していないものばかりだ。再び思案し、最近職場を移り、自分の現地研究サイトを持つことになったので、自戒の意味を込めて、それに纏わる件を紹介することにした。あらかじめ乱文をお詫びしておく。

そんなわけで事の始まりは、昨年10月に現職に移った頃に遡る。5年半お世話になった鳥取大学乾燥地研究センターから、ご縁があって、大学の先輩でもある前任者の産休・育休の間の代理職員として、赴任した。監督官庁も文部科学省から農林水産省に替わり、冬の厳しい山陰(鳥取市)から、穏やかな山陽(広島県福山市)へ寓居も遷った。前任者の担当課題を引き継ぎ、「水田の窒素浄化機能を利用した水質改善」についての仕事をすることになり、夢だった現地研究サイトをもつことになったのだ。

室内実験を主な仕事にしてきたので、自分の現地研究サイトを持ったことのなかった小生にとって、自分のサイトを持つことは、大学在学中からの夢でもあった。あの頃は、自分のサイトを持つ同級生や後輩が羨ましかった。かねてからの夢が実現した喜びと、自分のサイトは

どんなものだろうという期待と不安が入り交じりつつも、わずかに喜びと期待の方が上回った状態で、10月下旬に初めて“自分の”サイトに赴いた。サイトは、広島県中部の山間地、職場から車で1時間少々のあるところにある。サイトは、「最初が肝心」とばかりに、浮かれ気分の新参者を陰しい表情で迎え入れた(写真-1)。

数年間現役を離れていた水田は、外見からは水田であったことが想像できないほど、雑草が生い茂り、一部には低木が枝を伸ばしていた。この時は3枚に見えた水田も、実は4枚だったほどである。サイトを眺めながら、途方に暮れた。同行した業務科員は、「開墾から、せにゃいけんのう。」暖かみのある福山弁でつぶやき、サイトに踏み込んで行った。

一通りの調査・測量を終えた帰りの車内は、少し暗めの空気が支配していた。業務科員は、「まゝ、水を吐かせて、機械を入れて何度か起こせば、田んぼにはなる。」と諭してくれた。しかし、どう水を吐かせるのか?どう開墾するのか?そもそも水田にするのに、何故水を吐かせる必要があるのか?頭の中ではクエスチョンマークが湧きあがり続けた。自力ではこのクエスチョンマークの霧を取り除けそうもないので、業務科員の暖かい言葉を信じることにした、というか信じるよりなかった。

職場では実験計画を考えた。大雑把な中身は決まっている。サイトの設計図も、自分のサイトの大きさや既往の文献などから、大体決まる。しかし、こと農作業のこととなると、どう決めたらいいのかさえわからない。腕組みをしては、固まるばかりの時間が過ぎた。



写真-1 10月下旬の現地研究サイト(休耕地)

* (独)農業・食品産業技術総合研究機構 近畿中国四国農業研究センター 〒721-8514 広島県福山市西深津町6-12-1



写真-2 サイトへの道を塞ぐ松の倒木 (2月上旬)



写真-3 実験用水田を覆う雪 (2月上旬)

弊センターでは、水稻の作付け法として「鉄コーティング湛水直播技術」を公表している(山内, 2007)。省力・低コスト化に優れた技術である。貧乏研究者が職場から離れたサイトで実験するには、この方法がうってつけだと思い、意を決して専門家の部屋のドアを叩いた。この技術の使い方を教えていただくつもりだった。一通り、実験の概要を説明した後、専門家が最初に口にした言葉は、「品種は何使うの?」であった。「品種…」これも決めていなかった。「適当な品種を使うと、周りの農家さんに迷惑がかかるよ。水を使う時期も違うし、種子が外に流れたら、大変だ。周りの農家さんに合わせた方がいいよ。」素人丸出しの小生に、言葉を選んで優しく教えて下さったが、素人を打ちのめすには十分なパンチ力を備えていた。

もう10年以上前のことである。小生の出身研究室には5人の卒論生が在籍していた。卒論の〆切が迫ったある日、同級生の一人が小生の卒論の“はじめに”を読んで言った「“人口爆発”と“食糧増産”かぁ。5人中4人が同じこと書いてるよぉ。」当の本人もこの4人に含まれていたのだが、当時はこの2つが流行っていた。現在なら“持続可能性(持続可能な発展)”と、“環境問題”か“バイオエネルギー”と言ったところだろう。(ちなみに、残りの一人は“ラムサール条約”だったと記憶している。)とはいえ4人(5人とも?)は、それぞれがそれぞれなりに、自分が農学部在籍し、農業に関わる研究を行っているが無意識ながらも認識していたのだろう。その後、農業に関する研究をしているつもりながら、農業自体を学ぶことなく時は流れ、小生も博士(農学)という学位をいただいた。そして、農業を専門とする研究者の職に就いた。しかし、いざこの専門家が現場研究サイトに出てみると、わからないことだらけだ。後ろを振り返り、ため息がとまらない日々が続いた。顔を上げ「夢だった自分の現地研究サイトを持てたのだ。それに小学校一年生でアサガオを育てて以来、植物を育てていなかった自分が、日本の農業を学び・体感できるこれほ

どのチャンスは他にない。」と思えるようになるには、時間が必要だった。

先日、個人的に愛しの自分のサイトを見に行った。以前に作っていただいた排水路が見事に機能して、水が吐け、機械を圃場に入れて田起こしができる位に乾燥していることを期待していた。しかし、自分のサイトはそれほど甘くはなかった。サイトへの小道には、雷でも落ちたのか、松の大木が倒れ、行く手を阻んでいた(写真-2)。普通乗用車は何とか通れたが、機械を積んだトラックは通れそうもない。当の水田も負けじと積雪5cm、実験予定の3枚目は一面真っ白。作っていただいた排水路は凍り付き、水は吐けていない。とても機械は入れそうにない。開墾は延期だ。天気予報では雪ダルマが整列している。サイトは相変わらず手厳しい(写真-3)。

この手厳しいサイトには、じっくり・みっちり、教えていただきたいものだが、そう悠長に構えてもいられない。現実的な時間(季節と任期)も迫っている。今年度中に水田整備を終えて、来年度早々に、実験を開始しなければ、いろいろな〆切に間に合わない。どこまでできるかは不透明だが、周りの皆さんのご協力をいただきつつ、お天気に恵まれることを祈りながら(これも現地研究サイトの醍醐味だ)、仕事にあたりたいと考えている。

最後に、この仕事の成果がまともれば、本誌に投稿させていただきたいと考えているので、将来のレフリーの皆様には、くれぐれもお手柔らかな査読をお願い申し上げる次第である。

引用文献

山内 稔(2007):技術マニュアル,鉄コーティング湛水直播技術と飼料用稲栽培への適用, pp. 1-22.(独)農業・食品産業技術総合研究機構,近畿中国四国農業研究センター。

受稿年月日:2008年2月8日
受理年月日:2008年2月14日